

フィルドゥスィー以前のシャー・ナーメ

黒 柳 恒 男

は じ め

ペルシア文学において今日シャー・ナーメ *Shāhnāmeḥ* (王書または列王紀略) と言えばフィルドゥスィー *Abū al-Qāsim Firdousī* が 30 有余年の歳月を費して西歴 1010 年頃に完成した約 6 万句より成るイランの神話, 伝説, 歴史を詠んだ一大民族叙事詩を指すことは申す迄もないが, 彼以前にも散文・韻文によるシャー・ナーメと題する作品が書かれたのも事実である。しかし残念ながらこれらの作品は序説の一部が現存するのみで, 他は全て散佚してその内容を正確に知るよしもないが, 中世の資料にはこれらに関する記述が散在している。そこで筆者はこれらの記述を丹念に集め整理し, フィルドゥスィー以前にどのようなこの種の作品があったか, また大詩人は何に基づいてあの龍大な作品を詩作したかを検討してみたい。イスラーム期前のイラン特にサーサーン朝時代における歴史編纂は専門分野外であるから割愛し, ここではパフラヴィー語文献からアラビア語に翻訳されたイラン列王紀略についての略述から始めイラン資料を時代的に記述検討する。

小論執筆に際しドイツの碩学 T. Nöldeke の研究¹⁾を始めイランの諸学者 Muḥammad Qazvīnī²⁾, H. Taqīzādeh³⁾, および Z. Şafā⁴⁾ の秀れた研究に負うところが大きであった。

1. *Khudāy-nāmeḥ*

イスラーム中世文化史においてペルシア人 *Ibn al-Muqaffa'* (約 760 没) が *Khudāy-nāmeḥ* (中期ペルシア語 *X^vatāy-Nāmak*) を始めいくたの中期ペルシア語作品をアラビア語に翻訳し

-
- 1) T. Nöldeke: *Das Iranische Nationalepos*, Strassburg, 1896.
筆者はこの書を見る機会がなかったので下記の英訳を利用した。
Nöldeke's "The Iranian National Epic" tran. by L. Bogdanov. *The Journal of the K.R. Cama Oriental Institute*, No. 6. Bombay, 1925.
 - 2) Muḥammad Qazvīnī: *Bīst Maqāleh*. Vol. II. Tehran. A.S. 1332.
 - 3) H. Taqīzādeh: *Shāhnāmeḥ va Firdousī, Hazāreh-yi Firdousī*. Tehran. 1944.
 - 4) Z. Şafā: *Ḥamāseh-sarāy dar Irān*. Tehran. A.S. 1333.

たことはあまりにも有名な史実である。彼以外にもその後いく人かのペルシア人によりペルシア史譚、列王紀略が翻訳、翻案されたことは後の文献によって明らかである。しかしこれらの作品はペルシア語によるフィルドゥスィー以前の諸作品と同様に残念ながら散佚したが、中世のアラビア、ペルシア語作品にはこれらの書物を利用した跡が歴然としている。

そこでペルシア語作品以前に王書を主題に書かれたアラビア語作品および翻訳者を序説の意味で採り上げてみよう。ペルシア文学史の分野から言えばこれらはアラビア語作品であるから含まれないのは当然であるが、シャー・ナーメ研究の見地からこれらを除外することは適当と思われぬ。

まず言語的問題として *Khudāy-nāmeḥ* と *Shāh-nāmeḥ* との相違であるが、前者は既述のように中期ペルシア語 *X^vatāy-nāmak* の変形ではあるが、シャー・ナーメと同じく「王書または列王紀略」の意である。*Khudā* は現代では“神”を意味することは申すまでもないが、近代ペルシア語初期においては“王”を意味することがしばしばあった。*Steingass: Persian English Dictionary* には“god, master, owner”だけで“王”は記されていないが、*Muḥammad Mo‘in* 教授はペルシア語辞典、*Borhān-e Qāṭe‘ (Vol. 2)* “*khudā*”の脚註においてパフラヴィー語および *Pāzand* において *X^vatāy* は *shāh* を意味し、*X^vatāy-nāmak* = *shāh-nāmeḥ* と記している。フィルドゥスィーは「カーブル王メヘラーブ」を *Mehrāb Kābul khudāy* との表現を用いている。*Ḥamza al-Iṣfahānī* のアラビア語文献にもサーサーン朝最後の王 *Yazdigird III* を殺害した *Māhūya* の子孫は現在までメルヴおよびその近郊で「王殺し」*Khudāh kushān* と呼ばれていると述べている⁵⁾。ブハーラー史に現われる *Bukhār khudāt* やサーサーン朝の祖 *Sāmān khudāt* も王の意であろう⁶⁾。

後述する「シャー・ナーメ新序」によるとサーサーン朝王 *Anoshīrwān (Khusro I 531 ~ 579)* および最後の王 *Yazdigird III (632 ~ 651)* の治世に編纂されたという *Khudāy-nāmeḥ* は人類の祖 *Kayūmarth* からサーサーン朝末期の諸王に至るまでの神話、伝説、歴史に関する書で、後のシャー・ナーメの場合と同様にサーサーン朝に関する記述には歴史的価値があるが、他の部分は文学的価値から判断すべき書であり、アラビア語に翻訳されて以来アラブ史家がペルシア史記述に際し最も頼りとした典拠であったことは周知の通りである。勿論原典・翻訳ともに散佚した現在ではその内容を正確に知るすべがないとはいえ、散佚前に多くのアラブ史家に利用され、その史書に集録され、また *Khudāy-nāmeḥ* の流れをくんで後に近代ペルシア語で書かれたシャー・ナーメから略々その内容を推測することが出来る。

5) *Ḥamza al-Iṣfahānī: Tārīkh sinī mulūk al-arḍ wa al-anbiyā’*. Berlin. n.d. p. 43.

6) *Khudā* が *master, owner* の意では今日単独では用いられないが、合成語として *kadkhudā* 「村長」*nākhudā* 「船長」のごとくに用いられる。

Muḥammad b. Ishāq al-Nadīm の al-Fihrist (988 A.D. 作) における Khudāy-nāmeḥ および関連事項の記述によると, Jabala b. Sālīm が翻訳した書として「ロスタムとイスファندیヤールの書」Kitāb Rustam wa Isfandiyār がある⁷⁾. この書は Khudāy-nāmeḥ とは別の本であるが, 後のシャー・ナーメに含まれている有名な物語である. Ibn al-Muqaffa' に関する記述では彼が翻訳したペルシア史関係の書物として Khudāy-nāmeḥ fī al-siyar, Kitāb Ā' in-nāmeḥ, Kitāb Mazdak, Kitāb al-Tāj があげられている⁸⁾. これらの書物をよく利用した最も著名な史家 Ibn Qutaiba (889 没) の 'Uyūn al-Akḥbār がある. 彼はその中で「私は al-Tāj で読んだ」⁹⁾「Kitāb al-Ā' in で読んだ」¹⁰⁾「Siyar al-'Ajam で読んだ」¹¹⁾ とよく述べている. Siyar al-'Ajam「ペルシアの歴史」は Khudāy-nāmeḥ を指すものと思われる. al-Fihrist にはこの他にペルシア語からアラビア語への翻訳者名として小論のテーマに関係する人物では Ibn al-Muqaffa' を筆頭に, Khudāy-nāmeḥ (原典では Ikhtiyār-nāmeḥ となっているが明らかに Khudāy-nāmeḥ の誤りである) として有名な Kitāb Sira al-Furs (ペルシア人の伝記) の訳者 Ishāq b. Yazīd, この他に Muḥammad b. al-Jahm al-Barmakī, Hishām b. al-Qāsim, Mūsā b. 'Īsā, Zādūya b. Shāhūya al-Iṣfahānī, Muḥammad b. Bahrām al-Iṣfahānī, フェールス州シャープール市の聖職者 Bahrām b. Mardānshāh (原典では Nisābūr とあるが Sābūr の誤りである) および 'Umar b. al-Farrukhān の名があげられている¹²⁾. なお始めてペルシア史に関する書物がアラビア語にいつ翻訳されたかを知る史料はないが, H.A.R. Gibb が al-Masū'dī を典拠として指摘しているところでは¹³⁾, ウマイヤ朝カリフ・ヒシャーム (724~743) のためにペルシア諸王の歴史およびその他のペルシア語の書物が翻訳された. ヒシャームの書記であった既述の Jabala b. Sālīm がかなり翻訳したものと考えられるが, Khudāy-nāmeḥ は訳書に含まれていないと考えるのが妥当であろう. なぜなら al-Fihrist の「諸王の正確なる伝記, 物語についてペルシア人が著わした書物名」の項でも Jabala b. Sālīm が訳した二書は明記されているが, 他のペルシア史書 (Khudāy-nāmeḥ を含む) は列記されているのみで訳者はあがっていない.

Khudāy-nāmeḥ の訳は Ibn al-Muqaffa' のそれが代表的作品ではあるが, その後彼以外の者によってもアラビア語に翻訳・翻案されたことは明らかである. al-Fihrist の記述を裏付け

7) Ibn al-Nadīm: al-Fihrist. Cairo. n.d. p. 438.

8) ibid. p. 178.

9) Ibn Qutaiba: 'Uyūn al-Akḥbār, al-Sulṭān. Beirut. n.d. p. 23, 31, 38, 55,

10) ibid. p. 27, 103.

11) ibid. p. 150. al-ḥarb, p. 73.

12) Ibn al-Nadīm, op. cit. p. 356.

13) H.A.R. Gibb, Studies on the Civilization of Islam. Boston. 1962. p. 63.

るものとして、それより約 20 年以前 961 年にシェウビーヤ運動の熱烈なペルシア側支持者であった歴史家 Ḥamza b. al-Ḥasan al-Iṣfahānī (約 970 没) の著書「地上の諸王および予言者の年代記」Tārīkh Sīnī Mulūk al-Arḍ wa al-Anbiyā' の中にこれらに関する貴重な記述がある。彼はペルシア史の章執筆に際し史料についてこう述べている¹⁴⁾。「私は八種の写本を入手した。それは Ibn al-Muqaffa' の訳「ペルシア諸王伝」Kitāb Siyar Mulūk al-Furs, Muḥammad b. al-Jahm al-Barmakī 訳「ペルシア諸王伝」、カリフ・アル・マームーンの宝庫より取出された「ペルシア諸王史」Tārīkh Mulūk al-Furs, Zādūya b. Shāhūya al-Iṣbahānī 訳「ペルシア諸王伝」Muḥammad b. Bahrām al-Iṣbahānī 訳または編纂「ペルシア諸王伝」Hishām b. Qāsim al-Iṣbahānī 訳または編纂「サーサーン朝諸王史」Tārīkh Mulūk banī Sāsān, ファールス州シャープール地区の^{ムンバド}聖職者 Bahrām b. Mardānshāh 校訂「サーサーン朝諸王史」である。私はこれらの写本を集め、相互に比較してこの章の責を果した」という。また同書の他の箇所では¹⁵⁾、「Mūsā b. 'Īsā al-Kisrawī はその書でこう述べた。『私は Khudāy-nāmeḥ と呼ばれる書物（それはペルシア語からアラビア語に翻訳され“ペルシア諸王史”Tārīkh Mulūk al-Furs と命名された書物）を調べた。私はこの書の諸写本に幾度か目を通し、深く調べると、それらが異なっていることを知り、遂に相互一致した二写本を見出せなかった』」という。さらに別の箇所では¹⁶⁾、「^{ムンバド}聖職者 Bahrām b. Mardānshāh が語るところでは、彼は Khudāy-nāmeḥ という書の写本を二十種以上集め、それらにより人類の父 Kayūmarth から帝国がアラブに移った最後の時代までのペルシア諸王史を校訂・編纂した。」と述べられている。以上の記述からいかに多くの Khudāy-nāmeḥ の写本がアッバース朝前半に流布し、かつ Ibn al-Muqaffa' 以外の翻訳、翻案が多くあったかが明白である。かつて H. Zotenberg は al-Tha'ālibī の書の序文で¹⁷⁾、Ibn al-Muqaffa' 以後の Khudāy-nāmeḥ の翻訳または翻案は全て彼の翻訳に基づくと述べたが、Baron V. Rosen の研究以来今日では Ibn al-Muqaffa' 以外の訳者もパフラヴィー語原典から直接訳したという説が強い¹⁸⁾。

次に第三のアラビア語史料として al-Bīrūnī が西暦 1000 年頃著わした Āthār al-Bāqīya を調べてみよう。今後ペルシア語資料を含めて既述の人名がかなり重複し煩雑と思うが、小論の性質上御容赦願いたい。彼は Kayūmarth の記述で後述の Abū 'Alī Muḥammad のシャーナメにふれ、アブー・アリーは次の資料に基づいて記録を訂正したという。すなわち Ibn

14) Ḥamza al-Iṣfahānī, op. cit. p. 9~10.

15) ibid. p. 15.

16) ibid. p. 19.

17) al-Tha'ālibī: Ghurar Akhbār Mulūk al-Furs wa Siyar-hum. Texte Arabe publié et traduit par H. Zotenberg, Paris, 1900. p. XLII-XLIII.

18) Z. Safā; op. cit. p. 69~70.

al-Muqaffa', Muḥammad b. al-Jahm al-Barmakī, Hishām b. al-Qāsim, Bahrām b. Mardānshāh, Bahrām b. Mihrān による「諸王伝」Kitāb Siyar al-Mulūk である。この他に彼は自己の記述をヘラート出身ゾロアスター教徒 Bahrām のそれと比較したと記されている¹⁹⁾。

以上でアラビア語資料を終え、ペルシア語資料に移る。既述のアラビア語資料よりも早くすなわち 957 年に書かれたシャー・ナーメ旧序（これに関しては後に詳述する）には *Pisar-e-Muqaffa'*（すなわち Ibn al-Muqaffa'）の他に Muḥammad-e-Jahm Barmakī, Zādūya b. Shāhwī, Bahrām-e-Iṣfahānī, Mūsā-yi-'Īsā Khusrawī, Hishām-e-Qāsim Iṣfahānī のペルシア諸王の書 (*nāmeḥ-yi-pādshāhān-e-Pārs*)、マアムーン の宝庫より、Bahrāmshāh-e-Mardānshāh Kirmanī, ヤズディギルド王の最高聖職者 mobadān mobad である Farrukhān, 同王の下僕 Rāmīn の名が述べられている²⁰⁾。旧序から 6 年後 963 年に Bal'amī が al-Ṭabarī の史書をペルシア語に訳したことは有名な史実であるが、訳者はその序文において、Ibn al-Muqaffa' の他に Muḥammad b. al-Jahm al-Barmakī, Zādūya b. Shāhwī, Bahrām b. Mihrān Iṣfahānī, Mūsā b. 'Īsā al-Khusrawī, Zādūya b. Farrukhān²¹⁾ の名をあげている。資料によって若干の相異は見られるが略々同一の人物が十世紀のアラビア・ペルシア語資料に収められている。次にこれらの人物を分類してみると、第 1 グループとしてパフラヴィー原典 *Khudāy-nāmeḥ* からの訳者として Ibn al-Muqaffa', Muḥammad b. al-Jahm al-Barmakī, Zādūya b. Shāhwī al-Iṣfahānī, Ishāq b. Yazīd をあげることが出来る。しかし Ishāq は al-Fihrist にのみ名があがり他の資料では確認できない。第 2 グループとして *Khudāy-nāmeḥ* の他に、他のパフラヴィー語原典から訳または編纂したもので Muḥammad b. Bahrām と Hishām b. Qāsim がいる。第 3 グループは先人の翻訳を校訂、編纂した者として Mūsā b. 'Īsā と Bahrāmshāh b. Mardānshāh がある。これら以外の人物はどのグループに属するかを知る資料はないが、十世紀前半以前にペルシア史について何らかの著述をしたことは明白である。なお以上の翻訳者、翻案者の中で Ibn al-Muqaffa' を除きほとんどなにも分っていない。彼に関しては余りにも有名であるから記述を割愛する。Muḥammad b. al-Jahm al-Barmakī はカリフ・ハールーンヌッラシードの治世における偉大な星占学者、詩人で、バルマク家に仕えたことがあったためバルマキーの *laqab* をつけたと考えられる。Zādūya b. Shāhwī (アラビア式に読むと Zādawāh b. Shāhawāh) はこの翻訳の他にペルシアの祭礼に関する著書が

19) al-Bīrūnī: *The Chronology of Ancient Nations*. translated by C.E. Sachau. London, 1879. p. 107~8.

20) Muḥammad Qazvīnī: *op. cit.* p. 52~56.

21) Abū 'Alī Bal'amī: *Tarjūmeḥ-yi-Tāriḥ-e-Ṭabarī*. Tehran, A.S. 1337. p. 5.
なお版により Mardānshāh および Hishām-e-Qāsim も含まれている。

あり、al-Bīrūnī は 3 回彼を引用している²²⁾。

要するに八世紀中葉 Ibn al-Muqaffa' がバフラヴィー語文献 Khudāv-nāmeḥ を Siyar Mulūk al-Furs と題してアラビア語に訳して以来、この書の評判が非常に高まったため、イラン系学者がその後自国の偉大なる歴史、榮譽をさらに誇ろうとして原典から訳出する者、アラビア語訳の校訂・編纂する者が続出したのであろう。しかしこれらの書物はやがて偉大なる歴史家たち Ibn Qutaiba, al-Dīnawarī, Ya'qūbī, al-Ṭabarī, al-Mas'ūdī, Ḥamza al-Iṣfahānī らの史書に利用・記述されるに及んでそれらの価値は次第に薄れ、全て散佚してしまった。またアラブの勢力が次第に衰えペルシア人の擡頭および近代ペルシア語の興隆が大きく作用したものと考えられる。そこでペルシア人は自国の列王紀略を近代ペルシア語で書くようになった。これは二世紀有余のアラブ支配から脱したペルシア人の民族的復興の現われである。

2. Abū al-Mu'ayyad Balkhī のシャー・ナーメ

ペルシア語で書かれ現在その名がいろいろな文献によって確認されている最古のシャー・ナーメはアブー・ル・ムアイヤドの作品であるが、既述のように残念ながら作品は散佚して書名をとどめているに過ぎない。彼に関してはペルシア詩人伝例えば Muḥammad 'Aufī²³⁾ の Lubāb al-Albāb や Rezā Qulikhān Hedāyat の Majma' al-Fuṣafā によると、サーマーン朝時代の学者、詩人の一人として断片的詩を引用しているに過ぎない。

Asadī Ṭūsī の Lughat-e-Furs²⁴⁾ にはかなり彼の詩が引用されているが、生涯についてはほとんどなにも分らない。Z. Ṣafā によると、彼は Yūsuf と Zulaikhā の物語を始めて詩作した詩人であるという。ここで問題とするのは勿論彼の詩ではなく、彼が散文で著わしたシャー・ナーメである。これに関するペルシア語最古の資料は西暦 963 年 Bal'amī による Ṭabarī 史書の訳で、Bīwarasb (Zaḥḥāk) の統治の章において、サーム、ダスターン (ザール)、ロスタム、ファラーマルズの名前をあげ、「彼らの行伝についてはアブー・ル・ムアイヤド・バルヒーが大きなシャー・ナーメにおいて多く述べている。」²⁶⁾と記されている。そこで当然この書は十世紀中葉以前に書かれたことが明白である。その後 1082～3 年にカスピ海南岸タバリスターン地方の君主カイ・カーウス Kai Kāūs がわが子ギーラーンシャー Gilānshāh のために書いた忠言・教訓の書物“カーブース・ナーメ” Qābūs-nāmeḥ の序において、「そな

22) al-Bīrūnī: op. cit. p. 53, 202, 207.

23) Muḥammad 'Aufī: Lubāb al-Albāb, Tehran. A.S. 1333. p. 264.

Rezā Qulikhān Hedāyat: Majma' al-Fuṣafā, Tehran. A.S. 1334. Vol. I. p. 201.

24) Asadī Ṭūsī: Lughat-e-Furs, Tehran. A.S. 1336. p. 61, 62, 69, 84, ….

25) Z. Ṣafā: Tārīkh-e-Adabiyāt dar Irān. Vol. I. p. 405.

26) Abū 'Alī Bal'amī, op. cit. p. 23~24.

たの曾祖父はシャムス・ル・マアラー・カーブース王で、ファルハーダーンの子アルギシュの孫であった。彼はカイ・ホスローの時代にギーラーンを支配し、アブー・ル・ムアイヤド・バルヒーはシャー・ナーメで彼について述べている。²⁷⁾と記している。また 1126 年に書かれた作者不詳「歴史と物語の要約」Mujmal al-Tawārikh wa al-Qiṣaṣ の序では執筆の資料が列記され、その中で「ナリーマーン、サーム、カイ・クパード、アフラーシヤーブ……の行伝はアブー・ル・ムアイヤドの散文より²⁸⁾と記されている。シャー・ナーメという言葉はないが、バルアミーの記述と一致するところから、彼の散文作品シャー・ナーメに違いない。1216 年頃 Ibn Isfandiyār が書いた「タバリスターン史」Tārikh-e-Ṭabaristān にも「フィルドゥスィーおよびムアイヤディーの韻文・散文によるシャー・ナーメで説明されているように²⁹⁾という記述がある。このことからアブー・ル・ムアイヤドのシャー・ナーメは十三世紀頃にはまだ存在していたことが明らかである。最後に作者・執筆年代不詳で 1053 年から 1324 年の間に書かれたものと推定される有名な地方史「スィースターン史」Tārikh-e-Sistān における彼に関する記述を調べると、アブー・ル・ムアイヤドの名はよく引用されているが、シャー・ナーメという言葉は現われない。しかし「Garshāsb の書」が序およびカルクーイーの火災の原因の箇所に現われ、「ブー・ル・ムアイヤドはガルシャースプの書において述べている。」という記述がある³⁰⁾。スィースターン史の校訂者である碩学 M. S. Bahār は脚註においてガルシャースプの書は恐らく彼のシャー・ナーメの一部であろうと記している。なお同書に「ナリーマーン、サーム、ダスターンの行伝はシャー・ナーメに述べられているゆえ繰り返す必要はない³¹⁾。」とある。イラン叙事詩研究の権威 Z. Šafā 教授はこれが「歴史と物語の要約」の記述と一致するゆえこのシャー・ナーメは疑いなくアブー・ル・ムアイヤドの作品を指すものと信じて述べている³²⁾。なお同地方史には「ブー・ル・ムアイヤドが Bundahishti の書で語る」という記述がある³³⁾。これはパフラヴィー語文献 Bundahishn 聖典で、彼が近代ペルシア語に翻訳したものと思われる。彼にはこのようにパフラヴィー語の知識があったゆえ、シャー・ナーメ執筆に際し Khudāy-nāmeḥ アラビア語訳よりもパフラヴィー語資料を利用したのではなかろうか、彼の作品には以上の他に「諸国の不思議」‘Aǰā’ib al-Buldān があったが、全てが散佚した。

27) Kai Kāūs: Qābūs-nāmeḥ, G.M.S. London. 1951. p. 5~6.

28) Mujmal al-Tawārikh wa al-Qiṣaṣ, Tehran. A.S. 1318. p. 2.

29) Ibn Isfandiyār: Tārikh-e-Ṭabaristān. Tehran. n.d. Vol. I. p. 60.

30) Tārikh-e-Sistān. Tehran. A.S. 1314. p. 1, 35.

31) ibid. p. 7.

32) Z. Šafā: op. cit. p. 97.

33) Tārikh-e-Sistān. p. 16~17.

3. Abū 'Alī Balkhī のシャー・ナーメ

アブー・ル・ムアイヤドに次いでペルシア語散文によるシャー・ナーメの作者として Abū 'Alī Muḥammad b. Aḥmad al-Balkhī がいる。前者と異なり彼の作品は一箇所引用されているに過ぎず、その生涯もバルフ出身で、十世紀の人物であるという以外にも判明していない。al-Bīrūnī は「古代諸民族の年代学」Āthār al-Bāqiya において「人類の起源に関し詩人 Abū 'Alī al-Balkhī によるシャー・ナーメにおいて述べられている。」³⁴⁾と記している。これに関しかって Baron Rosen はこのシャー・ナーメは後述のアブー・マンスールのそれと同じであろうとの説を発表し、イラン学者 Taqizādeh も「それについて確証はないとはいえ、筆者の考えでは真実らしい」と同調しているが³⁵⁾、Z. Šafā はこの説を斥けている。確かにアル・ピールニーはその書においてアブー・アリーのシャー・ナーメとアブー・マンスールのシャー・ナーメをそれぞれ明記して引用しているのであるから、これが同一の書でないことは明白である。

4. Mas'ūdi Marvazi のシャー・ナーメ

ペルシア語でシャー・ナーメを最初に詩作したのはマスウディー・マルヴァズィーでニスバが示す通りメルヴ出身である。既述の二作品と同様に散佚して、現在ではアラビア語で書かれた二作品にその名と詩の断片をとどめている以外に彼について全くなにも分っていない。

西暦 965 年に Muṭahhar b. Ṭāhir al-Maqdisī が書いた史書 Kitāb al-Bad' wa al-Tāriḫ³⁶⁾ には 2 箇所この作品に関する記述がある。それによるとまず「ペルシア人がその書物で述べるには——その真偽はアッラーのみ知り給う——人類を統治した最初の者の名はカユーマルスで、彼は裸で地上を歩き廻り、その治世は 30 年であった。アル・マスウディーはペルシア語により洗練されたカスィーダ qasīda でこう詠んだ。

nakhustin kayūmarth āmad bi-shāhī
 giriftash bi-gīti darūn pīsh gāhī
 chū sī sāl bi-gīti pādshāh būd
 kai farmānash bi-har jā rawā būd.³⁷⁾

34) al-Bīrūnī: op. cit. p. 107.

35) H. Taqizādeh: op. cit. p. 54.

36) この書を見る機会がなかったので、ペルシア語資料における記述を利用した。
 Z. Šafā. op. cit. p. 160~161.

M. Qazvīnī. op. cit. p. 14~15.

37) アラビア語表記で書かれているが、ペルシア語表記に改めた。

初めにカヌーマルスが王位に即き
 世で王権を獲得した。
 30 年間世を統治し
 彼の威令は到る所で認められた。

私がこの詩句をあげたのは、ペルシア人がこの詩句、qaṣida を敬い、彼らの歴史と想い、見做しているからである。」と述べられ、また他の箇所、イラン史最後の章において、「かくてペルシア諸王のことは終り、アッラーはその宗教を顕示し、約束を果された……。またアル・マスウディーはペルシア語によるカスィーダの最後で述べている。」

siparī shud nishān-i khusrawānā
 chū kām-i khwish rāndand dar jahānā.
 ホスローの栄光は終わった
 彼らが世で望みを遂げた時。

この韻律は Nizāmī の Khusro va Shīrīn のそれと同じ hazaj musaddas maḥẓūf である。

|U — — |U — — |U — —|

従ってフィルダッスィーがシャー・ナーメに用いた mutaḡārib とは異なる。

|U — — |U — — |U — — |U —|

マスウディーがこれを詩作した年代に関して Z. Ṣafā は西歴 912 年前後であろうと推定しているが³⁸⁾、G. Lazard は九世紀末あるいは十世紀当初だろうとしている³⁹⁾。

次に al-Tha'ālibī の「ペルシア諸王史」にも 2 箇所マスウディーの名があげられている。まず Ṭahmūrath 王の記述で「アル・マスウディーはペルシア語により彼の muzdawaja において、Ṭahmūrath がメルヴの Quhandiz を建設したと語る」⁴⁰⁾とあり、さらに Bahman の箇所では「アル・マスウディー・アル・マルワズィーはペルシア語の muzdawaja において語るところでは……」とある⁴¹⁾。この muzdawaja とは mathnavī に相当するペルシア語詩形で、al-maḡdīsī の記述に一致する。両者の記録からマスウディーの作品は西歴十世紀から十一世紀前半にかけて存在し、かつその詩がイラン人の間にかなり流布していたことが証明される。al-Tha'ālibī がこの史書を著わしたのはフィルダッスィーのシャー・ナーメ完成と略々同じ時期であるから、大詩人はその詩作に際しこの作品をも利用したのではなからうか。

38) Z. Ṣafā: op. cit. p. 162.

39) G. Lazard: Les premiers poètes persans. Paris. 1964. p. 22.

40) al-Tha'ālibī: op. cit. p. 10.

41) ibid. p. 388.

5. Abū Manšūr のシャー・ナーメ

既に三つのシャー・ナーメが書かれたことを述べたが、いずれも散佚してその名をとどめて
 いるだけで、ペルシア文学史のページを飾ってはいるが実質上ほとんど何も分っていない。し
 かしアブー・マンスールのために散文で書かれたシャー・ナーメは本文こそ散佚したが、その
 序文は現存し、フィルドゥスィーがシャー・ナーメ執筆における典拠となった資料であるゆえ
 最も重要なフィルドゥスィー以前のシャー・ナーメである。大詩人はその大作の序においてア
 ブー・マンスールの名こそ挙げていないが、明らかにそれと分る詩を詠んでいる。

いにしえから一巻の書^{ナーメ}があり
 多くの物語が収められている。
 各聖職者^{アムバド}の手にゆきわたり
 各賢者はそれを利用した。
 地主出身^{デフカーン}の武将^{バハルヴァーン}がおり
 勇敢，偉大，賢明，寛大。
 彼は古い時代の探求者
 過ぎし話を全て捜し求めた。
 諸国から老いた聖識者たちを
 招いてこの書について語り、
 世界の王者たち，名高く
 祝福された武将について彼らに尋ね、
 かくも惨めにわれらに伝えた
 世を彼らは初めいかに治めたか、
 いかなる幸運の星の下で
 彼らは日々偉業を成し遂げたかと。
 御前で一人一人の武将，諸王，
 世の運りについて語られた。
 将軍は彼らから話を聴くと
 名高い書の基礎を置いた。
 かくてそれは世で彼の記念となり
 貴賤をとわず彼を誉め称える⁴²⁾。

この中に現われる「地主出身の武将」はアブー・マンスールのことであり、彼が諸国からゾ

42) Firdousi: Shāhnameh, Tehran. Beroukhim 版. Vol. I. p. 8.

ロアスター^{ムーバド}教聖職者を招き往昔の諸王・武将の行伝を書かしたことが明らかである。フィルドゥッシーのこの詩句を具体的に証明する資料が三つある。一つはこれまでにしばしば引用した al-Birūnī の著書で、極めて簡略ではあるが 2 箇所⁴³⁾に述べられている。「Ibn ‘Abd al-Razzāq al-Ṭūsī はシャー・ナーメより自己の系図を作った時、Minōshihr (Minōchihr) の後裔とした。」とあり、さらに他の箇所では「Abū Manṣūr ‘Abd al-Razzāq によるシャー・ナーメによれば」とある。しかしこれだけでは既述のシャー・ナーメの場合と同じである。フィルドゥッシーのシャー・ナーメの序説として知られるものが三つあるが、中でも「旧序」muqaddimah-ye-qadīm-e-shāh-nāmeḥ と「新序」muqaddimah-ye-jadīd または muqaddimah-ye-Bāisunqurī が名高い。大詩人が書いたものでないことは勿論である。執筆年代とは前後するが、初めに「新序」を採り上げその後「旧序」(すなわちアブー・マンスールのシャー・ナーメ)について述べてみたい。

「新序」は Timūr の孫 Bāisunqur (1433 没) が 1428 年頃にシャー・ナーメの序文として書かせたもので、歴史的誤りがかなりあるが重要な箇所もあるので若干引用すると⁴⁴⁾、「語られるところによると、過去のペルシア諸王の時代特にサーサーン朝の王の中で公正なるアノーシールワーン王は先人の歴史蒐集および彼らの行伝の修正に強い関心を抱き、絶えず四方に人を派して諸国の王の歴史を研究させ、書を書庫に収めさせた。ヤズディギルド王の治世になると、さまざまな歴史に関する資料が王の宝庫に集められ、王はマダインの貴頭の一人にして勇氣・英知を兼ね備えた Dāneshwar Dehqān に命じて歴史を表にし、カヌーマルスの統治からホスロー・パルヴィーズの治世の終りまでを整然と記述させ、資料に述べられていないことは聖識者、学者に尋ねて増補された。……ホラーサーンでヤクタブ朝(サッフール朝)の治世に Ya‘qūb b. Laith は人を派してその書を持参させ、Abū Manṣūr ‘Abd al-Razzāq に Dāneshwar Dehqān がパフラヴィー語で記したものをペルシア語に翻訳するよう、またホスロー・パルヴィーズからヤズディギルド王の終りまでに起ったこと全てを補うように命じた。そこでアブー・マンスールは父の宰相 Sa‘ūd b. al-Manṣūr al-Ma‘marī に命じ、四名の者すなわち Herāt 出身 Tāj b. Khurāsānī, Sistān 出身 Yazdāndād-e-Shāpūr, Nīshapūr 出身 Māhūya b. Khūrshīd および Ṭūs 出身 Sulaimān b. Nūrīn (他の版では Shādād b. Burzīn) と協力して A.H. 360 (A.D. 970) にこの書を完成させた。」

この「新序」の中で特に後半の記述が重要である。Ya‘qūb b. Laith とか A.H. 360 年は明らかに誤りであるが、アブー・マンスールが自分の宰相に命じ四人の者と協力してシャー・ナ

43) al-Birūnī: op. cit. p. 45, 119.

44) Shāhnāmeḥ-ye-Firdousī: Tehran. A.S. 1343. Amir-e-Kabir 版. p. 7.

ームを執筆させたことは事実で、「旧序」の記述と略々一致している。「旧序」によると⁴⁵⁾、「Abū Maṣṣūr ‘Abd al-Razzāq は自分の宰相 Abū Maṣṣūr al-Ma‘marī に命じて、地主、賢者、世故に長けた者の中から書物の所有者を諸国から連れて来させた。そこで彼の下僕である Abū Maṣṣūr al-Ma‘marī は命により書面をしたため、ホラーサーンの諸都市に人を派して有識者を連れて来させた。諸方からヘラート出身 Khurāsānī の子 Shāh, スィースターン出身 Shāpūr の子 Yazdāndād, ニシャープール出身 Bahrām の子 Māhūya Khūrshid, トゥース出身 Burzīn の子 Shādhān が集った。彼らは諸王の業績、生涯を世における最初の王からペルシアの最後の王ヤズディギルドに至るまで蒐集し A.H. 346 年 (A.D. 957) ムハッラム月それをシャー・ナーメと命名した。英知ある者はこれを読めば、諸王、貴族、賢者の教養、統治機構、彼らの性質、行状、秀れた法令、公正、裁判、遠征、戦闘、諸国征服、復讐、夜襲、悲哀など全てをこの書から理解できよう」新・旧両序における四人物の中で二人物はフィルドゥスィーのシャー・ナーメにも現われる。Shādhān b. Burzīn については、アノーシールワーンの治世、Kalilah wa Dimnah がインドからイランにもたらされた記述の初めに、「ブルズィーンの子シャーダーンが何と言ったかをみよ」との詩句がある⁴⁶⁾。更にチェス (Shaṭranj) に関する詩の始めに

老いた賢者 Shāhūya はかく語った

老いた Shāhūya の言葉に耳を傾けよ⁴⁷⁾

と詠んでいる。T. Nöldeke の見解では、この Shāhūya と既述の Māhūya とは最初の一字がくずれているだけで恐らく同一人物であろうという⁴⁸⁾。

アブー・マンスールの命により四人の学者によって編纂された散文シャー・ナーメの本文は散佚したとはいえ、これに基づいて書かれたフィルドゥスィーのシャー・ナーメおよび al-Tha‘ālibī の「ペルシア諸王史」によって大略復原することが出来る。旧序にも述べられているように神話時代最初の王カユーマルスからサーサーン朝最後の王に至るまでの列王紀略を主軸とし、その中に数多くの逸話が織り込まれている。四学者は大筋を Khudāy-nāmeḥ またはそれに類する資料を利用して構成し、これ以外にあらゆる種類の民間伝承、物語を含めたのであろう。四学者がいずれもゾロアスター教徒であったことは、彼らが利用した資料の大部分がパフラヴィー語で書かれた資料であったことを証明する。T. Nöldeke の言葉を借りるなら⁴⁹⁾、「当時既に近代ペルシア語で書かれた大きな列王紀略が存在していたとしたら、その仕事をそ

45) Muḥammad Qazvīnī: op. cit. p. 34~36.

46) Firdousī: op. cit. Vol. 8. p. 2499.

47) ibid. p. 2471.

48) T. Nöldeke: op. cit. p. 28.

49) Ibid. p. 30~31.

んな特定の人物に託す必要はなかったであろう。アラビア語の資料はほとんど直接に用いられなかった。なぜならペフラヴィー文学がムスリムに無関係であったように、アラビア文学は学識あるゾロアスター教徒には無関係であったに違いない。」と述べられている。

さらにここで注目すべきことは「旧序」を見る限りにおいてはアラビア語彙の使用がきわめて少なく、わずか1~2%に過ぎないことである。このことから四学者がアラビア語の史料ではなくイラン固有の資料を利用した裏付けになろう。なおフィルドゥスィーのシャー・ナーメの特色の一つとしてアラビア語彙がきわめて少ないことは有名であるが、その理由として彼はアラブ侵入前のイランの歴史を書くため民族的色彩を濃厚にしようとしてアラビア語の使用を極力避けたとよく説明されるが、それと共に彼が直接利用した資料であるアブー・マンスールのシャー・ナーメにアラビア語彙がほとんど用いられていないことに影響されたものと思う。勿論この他にもフィルドゥスィーのスタイルはガズニー朝詩人のそれではなくてサーマーン朝時代のスタイルを踏襲していることも考慮せねばならない。

最後にアブー・マンスールについて略述すると、彼に関しては Ibn al-Athīr の al-Kāmil fi al-Tārīkh および Gardīzī の Zain al-Akhbār に A.H. 334 から A.H. 350 (A.D. 945~961) にかけてしばしば記されている。それによると彼はトゥースの豪族の出身で、サーマーン朝のホラーサーン地方総指揮官 Abū 'Alī Aḥmad Muḥtāj Chaghānī に仕えトゥースの太守であった。946年アブー・アリーがサーマーン朝 Nūḥ b. Naṣr に叛きメルヴ、ブハーラーに兵を進めた時、アブー・マンスールを同地方の総指揮官に任命したが、アブー・アリーが敗退したため、彼はレイ、アゼルバイジャンに一時逃れたが、後に Nūḥ と和睦してトゥースに戻り、960年には同朝の 'Abd al-Malik b. Nūḥ にホラーサーン地方総指揮官を任命され、同年彼は罷免されて Alptigin が同職に任ぜられたが、翌年961年に再びその地位に任命された。彼の最期に関し Gardīzī の記述によると⁵⁰⁾、彼はブワイ朝の Rukn al-Daula Ḥasan に手紙を書いて協定を求めグルガンに招いた。これを知った Ziyār 朝の Washmgīr は医師 Yuḥnā に金貨1千ディーナールを与えて A.H. 350 (A.D. 961) に彼を毒殺させたという。

6. Daqīqī のシャー・ナーメ

フィルドゥスィー以前にマスッディー・マルヴァズィーがシャー・ナーメを詩作したことは既に述べたが、彼に次いで詩作したのはダキーキーであった。前者の作品は二・三の断片的詩句が現存するに過ぎないのに反して、後者の作品は1千句がフィルドゥスィーの作品に収められている故古来からよく知られている。

まず大詩人がダキーキーについて詠んでいる詩句を若干訳出し、その後この詩人について検

50) Gardīzī: Zain al-Akhbār. Berlin, 1928. p. 44.

討してみたい。フィールドゥスィーはシャー・ナーメの序において「詩人ダキーキーの話」としてこう詠んでいる。

書物よりこれら数多の物語を
 朗吟者が人々に誦んだ時、
 世人はこの物語に心を惹かれ
 知者も心正しい者もそうだった。
 雄弁なる若者が現われた
 詩作をよくし、心明るい。
 この書物を詩に詠むと彼が言うと
 人々は心からそれを喜んだ。
 若者は悪癖を友とし
 常に悪事をねらっていた。
 突然彼に死が襲いかかり
 頭上に暗い兜をかぶせた。
 彼は悪癖に甘い生命をゆだね
 一日として世を楽しまず、
 急に彼の運命は逆転し
 奴隷の手にかかり殺された。
 彼は去り、この書は語られず
 彼の目覚めた運は眠った。
 神よ 彼の罪を赦し給え
 審判の日にその地位を高め給え。

さらに Gushtāsp の統治の記述に際し、その最初にフィールドゥスィーはダキーキーの夢をみたとして、次の詩句がある。

或る夜詩人はこんな夢をみた。
 薔薇水のような酒の杯を持っていると
 突然ダキーキーが現われて、
 その酒杯について語り
 フィールドゥスィーに声をかけて
 「カーウース王の法によらずに酒を飲むな。
 そなたが世で選んだ王
 運、王冠、王座は彼を慶ぶ。

王の王 征服者マハムード
 富をなにびとにも頒かち与う。
 今日より八十五年のあいだ
 彼の悲哀はへり 富は栄える。
 今後彼は中国に兵を率い
 全ての部将が道を開こう。
 彼は人にきびしく言う必要はない
 諸王の冠は全てその掌に入ろう。
 そなたはこの書を努めてきたのなら
 今や求めるもの全てが得られる。
 私も以前これについて詩作した
 もし見出したら惜しまれるな。
 ダシュターズプ、アルジャースプについて
 一千句を詠み わが命運は尽きた。
 もしわが作品が帝王の許に達すれば
 わが魂は地下より月に達しよう」
 さて私は彼が詠んだ詩を述べよう
 彼は土と化し、私は生きている。

この後で大詩人はグシュターズプ王の即位、ゾロアスターの出現、同王の帰依、アルジャースプ王との闘いを中心としてテヘラン版で 1001 句が引用されている。なぜフィールドゥスィーが先人ダキーキーの一千句を借用したかについてはいろいろな説があるが、まずシャー・ナーメ詩作の先人ダキーキーに対する敬意と考えられる。彼を評して大詩人は

彼は詩人の道案内でもあった

と詠んでいるように、ダキーキーが自分の先駆者・案内者であることを率直に認め、若くして世を去った偉大なる詩人への敬意、哀悼をこめて引用したのであろう。事実フィールドゥスィーは既述のアブー・マンスールのシャー・ナーメを素材とし、ダキーキーの詩作に刺激されて大作に着手したことは疑う余地はない。韻律もダキーキーと同じく *mutaqārib* を用いている。次に問題となるのはゾロアスターに対する取扱いである。大詩人が詩作に従事した十世紀後半から十一世紀当初にかけてイランにおけるイスラーム化はほぼ完全な形を採り、回教徒社会にあっていかにイラン固有の宗教の祖であるとはいえ、ゾロアスターの取扱いはきわめて重大で、ことによっては自己を取巻く回教徒社会の激怒をまねく結果になったことは明白である。それゆえ大詩人は夢物語に託して亡きダキーキーの作品をそのまま引用し、この宗教に対する自己

の見解を意識的に避けたのではなかろうか。Mustaufī Qazvīnī は Tārīkh-e-Guzīdeh において⁵¹⁾、ダキーキーに関して「彼は Amīr Nuḥ Sāmānī と同時代の人で、シャー・ナーメのうちグシュターズプの物語を一千句詩作した。フィルドゥッシーは自分の作品の価値を明らかにするためそれをシャー・ナーメに採り入れた。」と述べているがこの説には同意しかねる。

ダキーキーの生涯についてはほとんど分っていないが、Chaghānī 家のアミールやサーマーン朝の Maṣṣūr b. Nūḥ (961～976) および Nūḥ b. Maṣṣūr (976～997) に仕えた詩人であることはこれらの君主に捧げた頌詞から明らかで、サーマーン朝において Rūdakī に次ぐ第二の大詩人であった。Majma‘ al-Fuṣafā によると⁵²⁾、本名を Abū Maṣṣūr Muḥammad b. Aḥmad といい、Nūḥ b. Maṣṣūr の命によって Gushtāsb-nāmeḥ を詩作したという。出身地も Ṭūs, Balkh, Samarqand, Bukhārā の諸説があり、生没年も明白でなく、941～2 年頃生まれ、フィルドゥッシーの詩に述べられているように奴隷の手にかかって 978 年頃殺害された。彼がこの詩作を始めたのは 976～7 年頃といわれ、彼の死後 2 年して 980 年頃彼の偉大な後継者フィルドゥッシーが大作に着手した。彼は次の有名なる四行詩に基づきゾロアスター教徒の詩人であったと考えられている。

世の全ての美醜の中から
 ダキーキーは四つの特性を選ぶ。
 紅玉色の唇、堅琴の哀しい調べ、
 血の色した酒とゾロアスターの宗教。

しかし彼が回教徒であったという説もある。彼が何に基づいてシャー・ナーメを詩作し始めたかは明らかでない。フィルドゥッシーは「この書物を詩に詠むと彼が言う」と述べているが、この書物は一体何を指すのであろうか。Z. Ṣafā の研究によると⁵³⁾、既述のアブー・マンスールの命により書かれた散文のシャー・ナーメであるという。次になぜダキーキーが歴史の中途であるグシュターズプ王およびゾロアスターに関する部分から詩作を始めたかに関し、彼がゾロアスター教徒であったとしたら、自分の宗教に最も深い関係がある章から始めたとも考えられる。Encyclopaedia of Islam (new edit.) Dakiki の項で H. Massé は「確かではないが、彼がこの主題を選んだのはパフラヴィー語詩によるサーサーン時代からのテキスト、Ayatkār-i-Zarīrān (Memorial of Zarīr) を自由に使えたからであろう。」と述べているが、T. Nöldeke は「ダキーキーはその作品に示されているように古代ペルシア文学の深い知識を有していなかった。」⁵⁴⁾と述べ、さらに Z. Ṣafā もダキーキーが既出のパフラヴィー語文献を

51) Mustaufī Qazvīnī: Tārīkh-e-Guzīdeh. Tehran. A.S. 1339. p. 730.

52) Reżā Qulīkhān Hedāyat: op. cit. Vol. II. p. 641.

53) Z. Ṣafā: op. cit. p. 166.

54) T. Nöldeke: op. cit. p. 32.

直接に利用したという何らの証拠もない⁵⁵⁾と述べていることから H. Massé の記述は疑問になる。なおシャー・ナーメを中途から詩作し始めたことに関してはフィルドゥスィーの場合も同様で、彼が Bizhan 物語を最初に詩作したことはよく知られている。

む す び

サーサーン朝時代に編纂された伝統的イラン史 Khudāy-nāmeḥ はアラブ征服後イラン系諸学者によりアラビア語に翻訳、翻案されたが、その後西歴十世紀になってサーサーン朝 (874～999) の時代に二世紀有余のアラブ支配から脱却したイラン人は民族王朝樹立と共に自己の言語すなわち近代ペルシア語により自国の歴史を執筆し、これらの作品が集大成された結果フィルドゥスィーのシャー・ナーメとなった。ゆえにフィルドゥスィーのシャー・ナーメ成立は単に彼のごとき大詩人の出現による偶然の所産ではない。彼以前における既出イラン人による民族復興の発露ともいふべき諸作品なくしては彼の大作は生まれ得なかったであろう。さらにイラン民族主義の最も顕著なる成果として十世紀における近代ペルシア語の興隆がある。アラブの桎梏を脱したイラン人がこの言語を駆使し、題材をアラブ以前の栄光ある祖先の歴史に求めて次々にシャー・ナーメを執筆したのはアラブとの一線を画し、イラン民族の栄光に輝く神話、伝説的歴史を自国民に再認識せしめようとした努力の結果と見做すことができよう。十世紀における彼らのかかる努力がなかったらイラン民族固有の神話、伝説は永遠に忘却の彼方に葬られたことは明白で、フィルドゥスィーの偉業は先人の努力の賜物であると言うも過言ではなからう。

55) Z. Sāfā: op. cit. p. 166~7.

Synopses of Chief Articles

Shahnamehs before Firdousi

Tsuneo Kuroyanagi

It is a well known fact that Khuday-nameh was translated by Ibn al-Muqaffa from Pahlavi into Arabic in the eighth century. Since then the work became so famous and popular among the Moslems that many other works of this kind were translated or revised by Iranian scholars, such as Muhammad b. al-Jahm al-Barmaki, Hisham b. al-Qasim, Musa b. Isa, Zaduya b. Shahuya, Muhammad b. Bahram, and Bahram b. Mardanshah.

But these Arabic versions of Iranian mythological, traditional and partly authentic history were gradually replaced by Shahnamehs written in modern Persian in the tenth century, because the Iranians, who had been suffering from the oppression of the Arabs for about two centuries after the fall of the Sasanian Empire, realized their national renaissance and their mother tongue, modern Persian, became the important medium of expression in place of Arabic. With the establishment of Iranian Samanid dynasty, the compilation of their national history in their own language was greatly encouraged.

Before Firdousi's Shahnameh, five other prose and poetical works named Shahnameh were written in the tenth century, most of which only retain their names in various Persian and Arabic books. They are Shahnamehs written by Abu al-Muayyad Balkhi, Abu Ali Balkhi, Masudi Marvazi, Abu Mansur and Daqiqi. Among them the most noteworthy work is the Shahnameh compiled by four Zoroastrian scholars at the request of Abu Mansur, who was the governor of Khurasan in the middle of the tenth century. It was from this work that the great Iranian national poet, Firdousi, derived his materials in composing his Shahnameh consisting of about sixty thousand couplets.